



7月14日 孟蘭盆会法要

〔武田正知師 中央看板右横〕

しんらん同人

No.552
9・10
月号

浄土真宗本願寺派 誓願寺

〒171-0052 東京都豊島区南長崎1-3-8

【電話】03-3950-7828 【ホームページ】<http://www.seiganji-tokyo.jp/>

われもひかりのうちにあり

誓願寺住職 古賀尚之

歎異抄第十三章に、親鸞聖人の次のよう

背くものであります。

なお言葉が記載されています。「あるべき業
縁のもよほきば、いかなるふるまひもすべ
し……」このことは、私たちは、縁に触れ
たら何をするかわからないものを、みな同じ
ように持つてゐるという事をお知らせ下さつて
いるものです。

しかしながら、そうだからと言つて何もし
なくともよい、心のままに生きなさいとおつ
しやつてゐるのではありません。そのことを知つ
てゐる者と、知らない者とでは、おのずと行
動が違つてきます。

また、「造悪無碍」といながら、わざと悪
事を行う（自力）者や、「賢善精進」と自
らを善人として振る舞おうとする（自力）生
き方がありますが、いずれも、如来のお心に
き方がありますが、いずれも、如来のお心に

縁に触れたら何をするかわ
からぬものを持つてゐることに
気づいてゐる人は、危ないもの
を遠ざけた生き方を送ります。
それを「つつしみ」や「た
しなみ」と言います。

如來の「必ず救う」というお慈悲の心に歓
喜し、御恩報謝の生活が出来ない自分を慚
愧し、「そのようなお前だから、私はお前を
必ず救うのだよ」という如來の心にあらためて
歓喜の思いを味わい、つつしみの生活を送る、
念佛者の毎日であります。

この原稿を書きながら、蓮如上人のお言葉
「こころにまかせず、たしなむ心は他力なり」
を新たな気持ちで味わった次第です。





誓願寺 第二代住職
故岡本 泰仁

悪人が めあて

凡夫が往生するということ。煩惱具足の悪人が浄土に生まれるということ。このことはなかなか受け取りにくい問題である。

悪人が救われるということはありえない。悪人も救われるというのならよい。悪人も仏の教えに随順して、善人になるならば、救われるであろうと考える。悪人のまで救われるというのはどうしてもうなづけない。

淨土真宗の教えを聞いている人たちの中にも、念佛しているうちに善人になるだらうと考えている人も多い。今は煩惱具足の凡夫であつても、信心を得たときには、あまり煩惱もおこらなくなり心静かに、ここにこしながら念佛する人になるよう思つて、早くそんな人になりたいと思つてゐる。

信心を得て少しも変わらないようなら、何の役にもたたない。信心を得たなら、必ず変わると考え、いつになつたらその時期が来るのであつてゐる人さえいる。

悪人が悪人のまま救われるとは考えられない。それにはいろんな原因が考えられるが、私たちには、道徳観念、悪を廃し善を修めるという考え方根強くはいつてあるからであろうか。仏教と言えば、聖道自力の教えを考えて、修行して善根功德を積まなければ仏になれないという考え方、大きく影響しているようである。こうした考え方固執してゐるのは、無明に惑わされているからであり、如來の本願を説かれる善知識にあわないからである。

淨土真宗の教えは、凡夫のために説かれたものであつて、聖人のためのものではないと言っている。聖人は自らの力で善を行じ、仏となる力を持つ人であるから（そんな人がいるかどうかが問題であるが）聖人には用事のない事である。

例えれば、陸を歩いている人には救いの必要はないが、海でおぼれている人は救わなければならない。

そのおぼれている人を救うというのが如來の本願である。おぼれている者とは、煩惱に狂い、罪業を重ねてゐる凡夫である。この罪深き迷える凡夫を哀れと思召して救わんと願い、永い思案と修行の結果、阿弥陀仏という仏となり、南無阿弥陀仏という名号が出来上がつたのである。

南無阿弥陀仏は、必ず凡夫が救われ浄土にうまれゆく証拠なのである。このみ名のいわれを聞くばかりで救われていくのであつ

て、凡夫のはからいは全く不要である。はからう用事がないのである。

この如来の本願をいただくと、我が身の罪業を悲しむことも必要なれば、煩惱のおこることも問題にはならない。否、むしろ、煩惱が起ころるからこそ如來の救済に間違いがないのである。

もしも煩惱が起こらばず、善心が起ころるようであれば、お救いに漏れると心配しなければならないであろう。

煩惱に苦しむ者を目当ての本願であるからである。欲や腹立ち愚痴の心が起ころる、そうした凡夫のために起こされた本願であるから、悪い心が起こり、自らの浅ましさに泣くにつけても、往生間違いなしといただくのである。

こんな悪い心ではと思うのは、如來の真心、如來の本願を聞く人の姿ではない。かかる者をこそ、お救い下さる本願よと仰いで念佛申すのである。

ただし、どんな悪い心を起しても差し支えないと考えたり、悪を条件とするように思つたら、大変な間違いである。



岡本泰仁 法話風景（1978年頃）

佛には、法性法身と方便法身がある。法性法身は真如そのものであり、方便法身は真如を具現してくださったものである。だからこの佛身は一であつて二、二であつて一である。（安樂集）

「四苦八苦」生活苦、老苦、病苦、死苦、それに加えて愛する者と別れなければならない苦、怨みに思う者とともにいなければならない苦、求めても得られない苦、肉体が思うようにならない苦、これらの苦惱は必ず受けなければならぬ。そしてこの苦に悩まされない者はひとりもいない。

（序分義）

「法味抄」は、故岡本泰雄が「聖教を読みたいと思っても、漢文や古文で書かれているのでなかなか理解しにくい。わかりやすい仏教書がほしい。」という方々の願いに応じて、真宗聖教中から要文を抜き出し、意訳した冊子です。

聖語末の（）内の文字は聖教の書名を略記したものです。

「法味抄」より

【ご法座等のご案内】

9月 10月

9・8
(日)

午前十時

定例法座 婦人会物故者追悼法要

【加藤幸子師】

正午

医療相談【佐藤公彦医師】

10・13
(日)

午前十時

定例法座【上野隆平師】

正午

医療相談【佐藤公彦医師】

9・15
(日)

午前十時

定例法座 婦人会物故者追悼法要

【正午】

医療相談【佐藤公彦医師】

9・22
(日)

午前十時

定例法座 婦人会物故者追悼法要

【加藤幸子師】

10・20
(日)

午前十時

定例法座【上野隆平師】

正午

医療相談【佐藤公彦医師】

10・27
(日)

午前十時

定例法座 婦人会物故者追悼法要

【正午】

医療相談【佐藤公彦医師】

編集後記

八月は故高田慈昭師の一周年忌。永年にわたるご恩に感謝し、祥月命日合同法要でおまいりました。

連日報道されているあたり運転からの威嚇のVTRではまさしく、鬼形相であり、修羅の世界であります。縁に触ると、ここは、このようなことかと思わせられた次第です。

夏休みに九州から長女一家が上京。練馬区の次女一家も加わり、日頃坊守と二分生活が、最大時には十一分の大所帯になりました。さすがに近い年は「孫たちは来ても嬉しく、去りても嬉し。」の心境に近づいているようです。



[総勢 11 名の家族写真]

九月中旬に長男 古賀明徳が京都 大阪での三年半勉学を終了し帰京します。法務に不慣れのため皆様にもご迷惑をおかけすると思いますが、辛抱強くご指導をいただきますようお願い申し上げます。

【藍田誓子師】

彼岸会法要 祥月命日合同法要

【米田順昭師】